

れ。通信  
集者を経  
ア・ルー  
益スポット  
い有名人  
・ウォーキ  
たり』(明  
100冊を  
100冊を  
を読む)  
』(講談  
いた50  
、江戸  
を心が

写真=右 東都名所「永代橋深川新地」歌川広重・画 (国立国会図書館蔵)

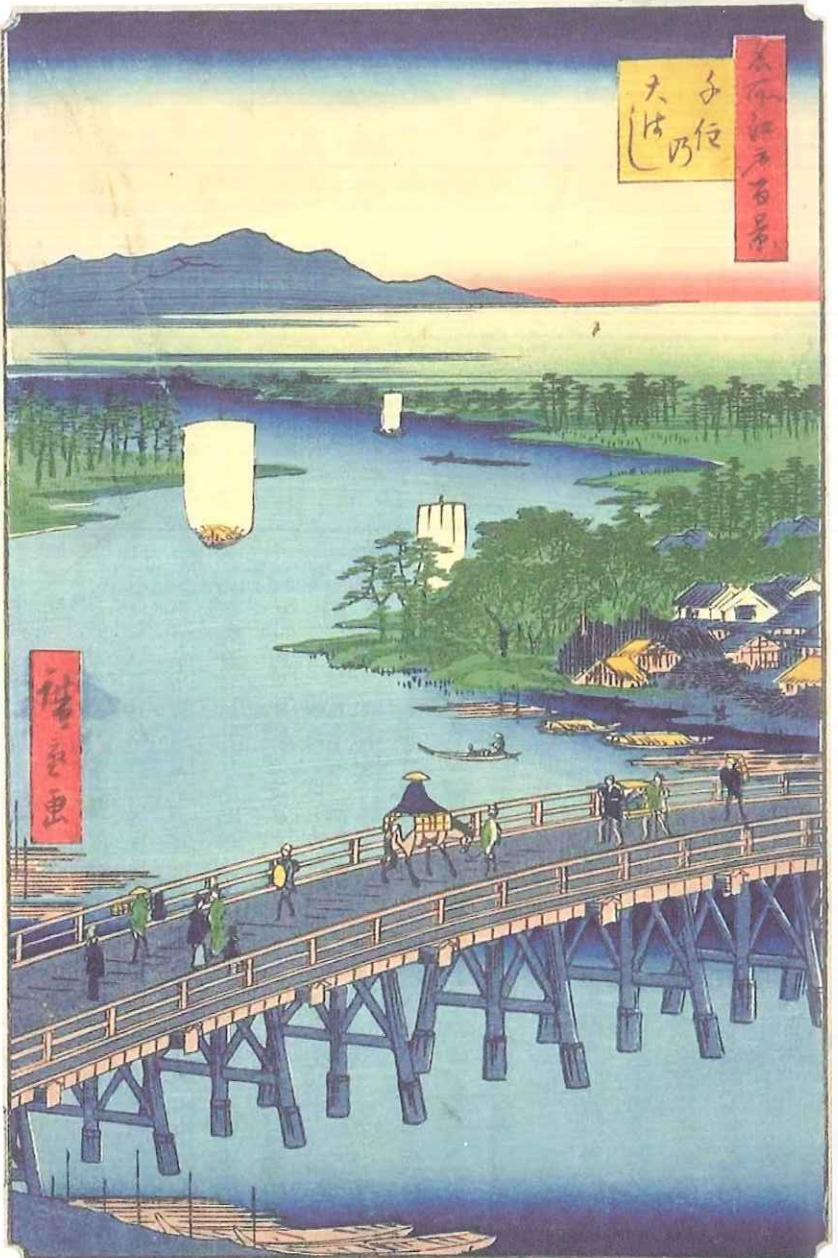
左「吾妻橋(台東区、墨田区)」歌川広重・画 (国立国会図書館蔵)

## 二 江戸時代の橋

### ○江戸時代、三種の橋

滔々たる流れを跨ぐ橋、さらさらと澄みきつた小川に架かる橋、深い谷を渡る橋。橋が架けられている状況は、千差万別である。「橋」は「おもに水流・渓谷、または低地や他の交通路の上に架設して通路とするもの」と、広辞苑に定義されている。「橋」は通路の一部に違いない、また、これがあるとないとでは、人間の日常生活の利便性を大いに左右することは疑いない。しかし、「橋」を単なる人や物が行き交う「通路」というだけで済ませてしまつては、なんの情緒や感慨、物語や含蓄ある話は生まれてはこない。「橋」は「通路」だが、同時にこちら側の世界から、異界へ渡る架け橋である。また、水流や渓谷を跨いでいるために、橋の姿は景色と相まって、さまざまな勝景を生みだしてきた。雪の日の橋、雨や風の日の橋、朝の霧や薄暮に霞む橋。「橋」は、人をして立ちとどまらせ、また渡つてみたくなる気持ちを沸きたたせる。そして、時に歌や詩を詠み、絵筆をはしらせる要素を醸しだす存在でもある。

江戸時代、大消費地であつた江戸に架けられた橋は、三百五十以上ともいわれている。道路や輸送手段が、未発達であつた江戸期において、全国各地から集まる大量の物資を、府内に点在する大名屋敷や、河岸まで運搬するには、船便に頼るしかなかつた。「浪速八百八橋」とい



名所江戸百景「千住の大はし」歌川広重・画 (国立国会図書館蔵)